

書評・紹介

趙 利 濟 著

『アジア太平洋地域の経済発展と人口転換』

時潮社, 1989年, B 5判, 278ページ

ここ数年来, アジア太平洋地域に関する関心は日本においてのみならず, 国際的にも急速にたかまってきている。アジア太平洋地域の地域概念は漠然としており一定の定義はない。政治的に, 経済的に, あるいは地理的にも包括される地域は明確ではない。しかし, いずれにしても21世紀は太平洋の時代あるいはアジアの時代と呼ばれてきた。太平洋岸に面したアジア地域, 特に東アジアや東南アジアの経済成長力は, 世界のいずれの地域よりもダイナミックであるということは, 国際的にも一般に認められている事実である。アジア太平洋地域の地域区分は別の問題として, このように呼ばれる地域に関する最大の関心は経済開発にあり, したがって, 発表される研究書の多くは経済発展に関するものであったと思われる。近代化を代表する経済発展の背後には人口転換があり, 経済発展と深いかかわりをもっている。経済発展を阻害するものも人口変数であり, 経済発展を促進するものも人口変数である。したがって, 経済発展と人口変数との関係についての研究は極めて重要であるにもかかわらず, その組織的研究が欠如していることはアジア太平洋地域研究の大きな欠陥といえよう。このようなアジア太平洋地域研究の欠陥を見事に補填したのが趙利濟博士(Cho Lee-jay)の本書である。著者は周知のように, ハワイの東西センター副総長, そして同センターの人口研究所長であると同時に東アジア, 東南アジアの経済と人口の関係の研究について国際的に, 指導的役割を演じている専門家である。人口・経済・社会と広く学際的に, そして国際的に現地と親しみ, 現地の専門家と深い交流をもつ著者ならではの著書といえるであろう。

本書は第1章のアジア・太平洋地域における人口展望から始まって, 第12章 アジア・太平洋地域の産業転換と人口動態で終わっている。人口から出発して, 産業転換と人口動態の関係で結ばれていることが最大の特徴である。中国, 韓国, 太平洋地域諸国の出生力分析は, アジアの開発途上国における出生力低下の現状とその展望を行ったものであり, 出生力の決定における伝統的, 文化的背景は開発途上国の出生力転換を論ずる場合, 特に留意されなければならない点であり, 著者はインドネシアのジャワとバリについてこの問題をとりあげている。また, 経済発展において教育がどのように重要な役割を演じるかを, アセアン諸国, 東アジア諸国, 北アメリカ, オセアニアといった文字通り環太平洋諸国についての比較分析を行っている。いわゆる人間資源の問題として興味深い実証的研究が第9章で行われている。第10章では特にアジアにおける都市化の現状と, 将来の展望を展開している。各国についてのプライマシー指数の計算結果は興味深いところである(p.207)。第11章の環太平洋地域論は最終章につながる役割を果たしているのである。ここで注目すべき第1の指摘は, この太平洋沿岸地域諸国では地域共同体としての相互作用と協調の必要性に対する認識の増大にともなって, 新しい対応が求められてくるが, その中で特に産業転換と人口転換の両者に対応していくための“波動的調整”が重要な課題となるということである。第2に, この地域の開発途上国が韓国や台湾のような新興工業国の率いる楽隊車(“bandwagon”)に乗り込もうとして生ずる“密集効果”(crowding effect), 第3に, 日米の科学革命の役割を指摘し, 最後にこれらの国の制度的処理の困難な問題の重要性があげられている(p.243)。最終章の第12章には本書の結論でもあり, 著者のもっとも重要な主張の理論的根拠が示されている意味で特に興味深い。いずれにしても, アジア太平洋地域がこの地域のみならず, 世界的な関心の対象となっている今日, 本書は新しい重要な文献を追加したといえよう。

(内野澄子記)